エッセイ

「映像」を教えるということ

社会マネジメント学科 教授 井　坂　　聡

大学を卒業してそのままフリーの助監督になり、映画・テレビの現場に飛び込み無我夢中で過ごしてきて、気がつくと30数年の歳月が流れている。この間に劇場用映画を９本とテレビドラマなどを数十本監督させていただいた。そして様々なご縁の中で、相模女子大学に着任して間もなく１年が経とうとしている。

教員として学生に映像を教えるのは初めてではないが、今まで関わってきた日本映画学校（現・日本映画大学）や日本大学藝術学部映画学科の学生は、いわばプロ志向であり、映像の世界の基礎知識や言語を共有している前提で指導を行ってきた。しかし相模女子大学の学生は、映画やテレビの世界に憧れはあっても、必ずしもプロ志向というわけではないであろうし、どういうさじ加減で指導していけばよいのか、正直手さぐり状態から始まった。しかし今となってみれば「案ずるより産むが易し」であった。「何かを創りたい」という思いにプロとしての知識・技術の有る無しは関係なく、人に何かを伝えたい届けたいという出発点も、プロとアマに違いがあるわけではない。むしろ、何も知らない素直さが人の心をしっかりと掴むということもある。

私のゼミでは、夏休み明けから２本の作品の制作を行った。いずれも「さがまちコンソーシアム」のプロジェクトで、１本は『さがまちバンバン』という８分間の番組、１本は神奈川県国民年金基金の30秒CMである。『さがまちバンバン』は希望すれば空いている枠を提供してもらえるが、CMの方は他大学を含むコンペがあり、ゼミからは５本の企画を提出し、その内の１本が見事選出されたものであった。

『さがまちバンバン』は J:COMチャンネルで2015年12月16日～31日まで毎日１回放送され、CMは2016年の１年間、最初はやはりJ:COMで、４月からはTVKなどで流していただけるのだが、両作品とも出来ばえについて大変高い評価をいただいた。お断

りしておくが、どちらも企画立案から撮影、編集、音楽や効果音の選択、テロップ作成を、ゼミの学生が全部自分たちで考えて行ない、私は指導と言っても、カメラや編集ソフトの「技術的」な扱いを教えただけである。勿論聞かれれば「こんな画があるといいね」あるいは「見る人の立場になって、必要な情報が足りているかどうか検証してごらん」などとアドバイスはしたが、最終的な判断は全て彼女たちが下した。むしろテロップなどは若い感性でセンスよく作り込んでおり、私の出る幕などなかったぐらいである。

では、感性に任せておけば事足りるのかというと、そうではないこともまたご承知の通りである。映像に限らず藝術も学問も、自己の思想や感情が的確に相手に伝わったときに初めて価値が見いだされるのであって、そうでなければ自己満足にすぎない。この「伝える」ために存在するのが「技術」である。技術とはきちんと伝えるための創意工夫の集積とも言えよう。ここで大切なことは、技術は手段であって目的ではないということ。我々プロも陥りやすい罠であるが、映像系大学の学生が作る映画で、技術という方法論が先行してしまい、肝心の伝えるべきことを見失ってしまう失敗例を多々目にしている。先程の話に戻れば、ゼミの学生たちは、まさに伝えたいものを見失わなかったら、他人にきちんと届けることが出来たと言えよう。

この前提を踏まえて、今までも相模女子大学でも、私は映像を教える出発点として「カメラを構えたときに何を切り取るのか」を意識づけさせることから始めている。カメラにはレンズの画角で定められた「フレーム」があり、「撮影」とは自分の写したいものをそのフレームの中に収めていく行為であるが、人間の目のようにはレンズは融通が利かないので、何をどう撮るのかがしっかりイメージされていないと、いざ撮影しようとしてもどうフレームを作ればいいのかが分からなくなってしまう。具体的には皆さん自身も経験があると思うが、どこからどこまで写すのか、どこにピントを合わせるのか、光線の方向やバランスはどうなのか、などを考えてフレームを作るのであるが、その取捨選択には何らかの「理由」があり、その理由が曖昧であると、撮影された映像も曖昧なものになってしまう。この理由を明確にすること、すなわち何を撮るのかをハッキリさせるために必須なのが「何を伝えたいのか」であることは、もうお分かりであろう。

さらに一枚の写真と違って、映像作品は複数の動画の組み合わせで構築されているが、一つ一つの動画（ショット）には相互に極めて論理的な繋がりが要求されてくる。それぞれのショットが明確な意思を持って撮影されたとしても、その組み合わせや順番に論理性がないと、伝えたいことが分からなくなってしまうのは、文章と一緒であ

る。強調するのか控え目にするのか、動的なのか静的なのか、長さはどうするのかなど、それぞれの相乗効果を計算しながらショットの組み合わせを考える行為は、音楽的であるかもしれない。実際私は台本を読みながら、自分の中に生ずるあるリズム感に則って撮影設計を考えている。この辺りの、何をどう組み合わせると効果的なのかを知るためには経験値が必要になってくることは間違いないが、何度も繰り返しになるが、そもそも何かを伝えたいという思いがなければ、技術や経験値は何の役にも立たないのである。

文章と比較していただくと分かりやすいが、映像は瞬時に圧倒的な情報を私たちに提供することが出来る。と同時に、その圧倒的な情報量を処理しきれない、あるいは個々人によって一つの映像の中から受け取る情報が違うという場合もある。「映像を撮る」ということは、この情報量と自身の思想・感情の格闘の連続なのだとも言えよう。

対象物に対しカメラを向けるということは、そのまま自分の心と向き合うことである。そのことが無意識に刷り込まれること。それが映像を教える最大のテーマである。